

Newsletter

2014 | 夏 |

特定非営利活動法人ジェン
Vol.57

JEN
Japan Emergency NGO



迅速で 柔軟性の高い 支援を

アフガニスタンで発生した洪水と地滑り。

被災者への緊急支援を担ったのは、

これまでの活動で自立支援を実践してきた

現地スタッフたち。

その決断は早かった。

情報収集から出動まで、わずか3日。

多くの被災者が悲しみの中にある今こそ、

自立への道が始まっている。

2014年、JENは設立20周年を迎えました。

20th Anniversary

“JENの20の成長”をテーマにJEN20周年プロジェクトを行っています。

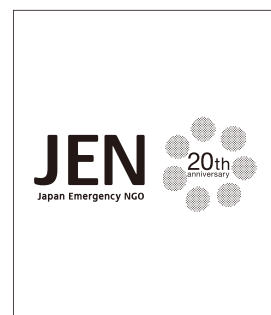
今後も、JENの活動を展開してゆくためにJEN20周年プロジェクトを通じて、皆さまと時間や空間を共有しながらさらなる目標に向かってゆきたいと思ひます。引き続きご支援をどうぞよろしくお願いいたします。 JENスタッフ一同

1

2014

記念ロゴマーク

2014年だけの記念ロゴマークを作りました!



3



“20の成長日記”をSNSからお届け!



2



20周年特設ウェブサイト

4



ワンクリックでかんたん募金

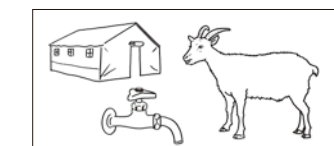
<http://www.jen-npo.org/jp/contribute/site.php>

5



「生きるちから」マンスリーサポーター～20周年スペシャル～

皆さまの応援をお待ちしております!



6



Chabo!
チャリティ☆ラン
～20周年スペシャル～
4月27日に、第三回を開催しました!当日の様子は、P6へ。

9



年表で振り返る20年

JENのこれまでの20年を、年表で振り返ることができます。このポスターのデータを欲しい方は、ご連絡ください。



8



記念イベント

皆さまへ感謝を込めて、JEN20周年記念イベント

これまで、これからも、JENを応援いただきありがとうございます。JEN20周年記念イベントを開催いたします。

2014年10月26日(日) 詳細は近日発表!

7



みんなで取り組む挨拶キャンペーン

挨拶キャンペーンのポスターが完成しました!現在8つの現地事務所に配布され、みんなそれぞれに楽しく「あいさつ」を学んでいます。



募集中

10



JENなんでもベスト20

JENが出会った人、モノ、なんでもベスト20です。現在、8つの事務所から続々と情報が届いています。支援者の皆さまからは、過去のニュースレターやウェブサイトの中から心に残るエピソードを募集します。ニュースレターのバックナンバーをご希望の方もご連絡ください。

募集中

12



20年間の“自立支援”ストーリー

20年間の思い出を集めています。支援者の皆さまの思い出エピソードを教えてください。ベストエピソードは、JEN20周年記念イベントで発表いたします。

(右)集まったエピソードの写真を集めたスナップショット



13



JENフォトブック

JENの活動地のフォトスナップを一冊にまとめます!

募集中

12



20年間の“自立支援”ストーリー

20年間の思い出を集めています。支援者の皆さまの思い出エピソードを教えてください。ベストエピソードは、JEN20周年記念イベントで発表いたします。

(右)集まったエピソードの写真を集めたスナップショット



11

募集中



“20年後のJEN”未来予想

支援者の皆さまとJENスタッフ、JENの活動に関わった多くの方々に、20年後のJENの姿や活動を好き勝手に想像していただきたいです。あなたの大予想、お待ちしております!

14

記念イベント



朗読の集い

詳しくは、JEN20周年記念イベントの会場にて!

15

募集中



事業アイデアコンテスト

「社会課題の解決」をテーマに、事業アイデアを募集します。JEN20周年記念イベントで投票を行い、選ばれたプロジェクトは、“みんなでつくる自立支援”として実現します。

16

記念イベント



チャリティオークション

詳しくは、JEN20周年記念イベントの会場にて!

19



新しい働き方、始めます

2014年、JENはオフィス環境改善作戦と並行してフリーアドレス化の準備を進めています。



18



オフィス環境改善作戦

17

募集中



実現しよう!クラウドファンディング

クラウドファンディングで、皆さまとともに考えた支援活動を実現します。詳しくは、JEN20周年記念イベントの会場にて!

20

募集中



??? (お楽しみに!)

20にちなんだアクションがこちらで。

早速、始まっています!

リコー社会貢献クラブ・Free Will様の15周年とJENの20周年記念、協働プロジェクトが始動しました!



お問い合わせ先

JEN東京本部事務局 20周年実行委員会

各種お申し込み・アイデアの提出は郵送またはEメールでどうぞ。

〒162-0824
東京都新宿区揚場町2-16
第二東文堂ビル7階
info@jen-npo.org
www.jen-npo.org

対談 シリア難民について

J E N プログラム・オフィサー
太田千晶

J E N 東京本部インタナー
永塚萌子

ヨルダンでのシリア難民支援のとお話をただけますか。

私はアメリカの大学に在学中です。大学のボランティアプログラムを利用して、東京本部で3か月間のインターンをしています。今回、ヨルダンを拠点にシリア難民支援に従事するプログラムオフィサーの太田さんにお話をうかがいました。

シリア難民の80％は都市部で生活しています。

永塚(以下N)：太田さん、今日は対談する時間を取ってください、ありがとうございます。ヨルダンでのこの数年の出来事の背景をご紹介いただけますでしょうか。

太田(以下O)：2011年3月にシリア内戦が始まって以来、ヨルダンはシリアから逃れてきた人々を受け入れています。現在、56万人超の人々が避難生活を送っており、年末には80万人を超えると予想しています。実はこのうち80％は都市部の「ホストコミュニティ(ヨルダン人が暮らす地域)」で暮らしています。彼らはヨルダン人同様に、アパートに住む人もいれば、知人や身内の家に身を寄せている人もいます。残りの20％は、難民キャンプで暮らしています。私の担当は、キャンプ内での支援活動です。N：流入するシリア難民を受け入れる国にとっては、急激な人口増加の対応が大きな負担になっているのではないのでしょうか。O：シリア情勢が悪化して以来、この3年

間に明るい兆しがありました。ヨルダン政府は、新たにキャンプを開設し、将来的にはザータリ難民キャンプよりも多くの難民を受け入れる体制を作りました。

「シリアに戻りたい。祖国の友だちと遊びたい」

N：難民としてヨルダンに暮らすシリアの人々は、どのような気持ちなのでしょう。O：人々は支援にとっても感謝しています。一目でも早く祖国に戻ることを大きな目標にして暮らしています。キャンプ住人の半数以上が12才以下の子どもです。彼らに夢は何かと訊いたら、宇宙飛行士や看護師になりたいと言います。そして、ほとんどの子どもたちは、祖国の友だちと遊びたい、シリアに戻りたい、と言います。

月刊雑誌の制作活動を通して様々な技術や才能を発見できました。

N：太田さんにとって、大きく印象に残ったことはどんなことでしょうか。

O：人々は、キャンプに避難する前、それぞれ手に職を持ち、夢を抱いていました。J E N は、キャンプで配布する月刊雑誌の活動を始めました。これには、多くの住人に参加してもらっています。情報の伝達手段として始めた活動ですが、人々がいろいろな技術や才能を持っていることを知りま

した。たとえば、雑誌の編集をする人はグラフィックデザインの技術を、寄稿する人は執筆能力がずば抜けてすぐれているなど、驚きの毎日です。雑誌事業を通して、彼らのことをより深く知ることができてとてもうれいです。詩を書くことが好きな19歳の男の子に出会ったので、彼の詩をこの雑誌に載せることにしたので、彼の詩はとてもワクワクし、いつか自分の詩の本を作りたいと、私に話してくれました。

N：困難な状況にもかかわらず、前向きな姿勢を保っているんですね。

O：はい。彼らはとても前向きです。互いの



家族を訪ね合い、支援関係者に食事を振舞っている姿を見かけることもあります。先日、日本から学生がやってきて、キャンプの暮らしを取材しました。すると、取材を受けた家族が彼らを食事に招いたのです。このエピソードからも、彼らがいかに温かい人々がうかがえます。

アメリカの法科大学院卒業後、迷わずJ E N の門をたたきました。

N：ところで、太田さんがJ E N に入局したきっかけを教えてください。

O：ある日、東北でJ E N の活動に参加し、その活動のドキュメンタリー映画を制作しているアメリカ人のことを知りました。何か自分に手伝えることはないかと、その人に連絡をして、J E N のことを知りまし

た。大学院卒業後、迷わずプログラム・オフィサーの職に応募しました。

N：太田さんは、J E N に入局直後に、ヨルダンに派遣されたと聞きました。アメリカからヨルダンへ、環境の変化はありましたか。また、現在の暮らしはいかがですか。

O：ワシントンD C での生活からヨルダンへ引越すのは、とても解放感がありました。法の世界と難民支援とはかなり様子が異なります。私は、支援の最前線で働く自分が大好きです。アンマンでは、週末ごとに国内を探検して楽しんでます。

N：ザータリには10万人を超える人が暮らしています。これだけ多くの人が暮らすために、キャンプはどのように管理、運営されているのですか。

O：キャンプは、人道支援機関が協力し合いエリヤごとに運営しています。たとえば、J E N では、26〜27歳くらいのヨルダン人を多く雇用しています。彼らは、地区担当者のアシスタントとして毎日キャンプ内の

担当地域に行き、難民たちと一緒に活動を行います。J E N では現在、長期化するキャンプでの活動を持続的に行うために、現地スタッフへの業務委譲などを計画しています。それは、故郷へ帰還後に「コミュニティを自分たちの手で創るときに役立つでしょう。

彼らが故郷に戻った後の自立した生活が、最終目標です。

N：この夏のJ E N の活動目標はどんなことですか？長期目標もお聞かせください。O：短期目標は、ヨルダンの水不足の解決です。ヨルダンは、世界で4番目に水不足の国なのです。J E N は水衛生環境を改善するための緊急支援活動の責任団体です。活動の大目標は、これらの活動の責任あるいは主体を完全に住民に移行すること。そして彼らが故郷に戻った後、自治会の設立や運営、衛生環境の維持と改善を積極的に進めていければと思っています。

N：日本の支援者の方に伝えたいメッセージはありますか？

O：支援者の皆様いつも人道危機に関心を抱き、J E N の活動を応援いただきありがとうございます。シリア危機は4年目に入りました。人々は皆、ある日突然、避難を余儀なくされ、安全な生活を求め、隣国に避難した一般市民です。もっと多くの方に、この人道危機について関心をもっていただきたいと感じています。

N：キャンプで多くの国際機関、住民の人たちと共に支援活動に従事されている太田さんは、やさしいお姉さんのようです。みなさんも、私と一緒に彼女の活躍を応援しましょう！太田さん、今日は、貴重なお話を聞かせてくださりまして、ありがとうございます。

1 イラク

衛生教育の広がる輪



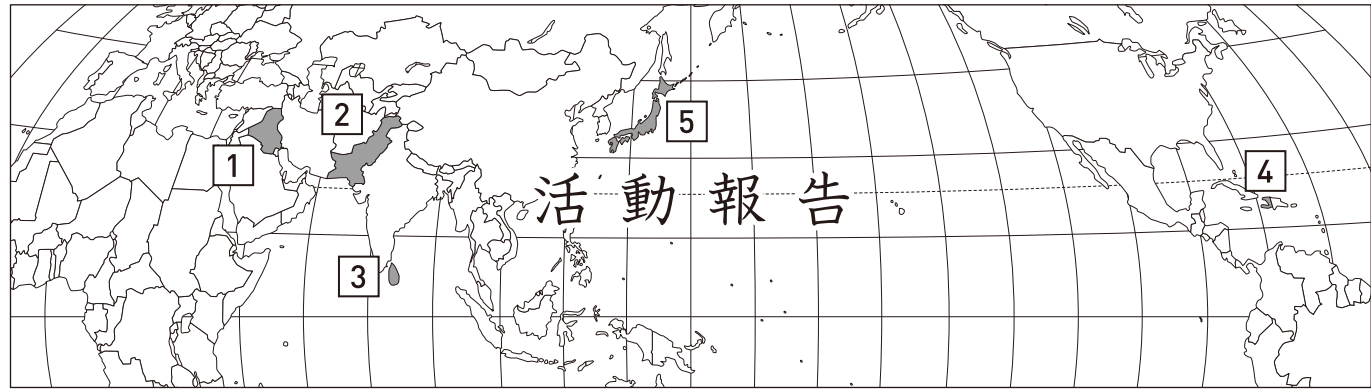
思わず笑みがこぼれる楽しいワイス形式。衛生教育を受ける子どもたち。

イラクの多くの学校では、学校環境の改善が長い間おぼろげにされてきました。学校のトイレは不衛生で損傷が激しく、下水が詰まっている、水が不足しているなど、生徒たちが学校で教育を受ける上で、学校に行きたくなくなる多くの悪影響を及ぼしています。こうした問題に対処するため、J E N は、イラク教育省と協力し首都バグダッドをはじめ、隣接するディヤラ県、キルクーク県、アンバール県で学校の衛生設備の修復と衛生教育の普及活動を実施しています。衛生教育では、生徒が楽しく学べるよう、衛生、食の安全と環境保全、子どもたちがかりやすい感染症とその予防方法等について座学のみならず、マンガや冊子を制作、配布して周知しています。今後は、衛生を促すポスターの掲示も行っていく予定です。2003年より継続しているこの活動は着実に実を結び、学校の健康被害が減少するなど、様々な問題が改善しています。なによりも、生徒たちの衛生に関する知識が向上したことで、イラク教育省、学校の教師や生徒とその家族の、衛生教育の積極的な学びに繋がっています。



避難先で、不安な生活を送る住民。支援物資をめぐってちょっとしたことでいざこざも。集会では、協力することの大切さを住民同士が学びます。(FATAにて撮影)

2009年以来、パキスタン政府と反政府武装勢力による戦の影響により、連邦直轄部族地域(FATA)とハイバルパクトゥンハ州(KP州)では、国内避難民の流出・帰還が各地で同時に発生し、混乱した状況が続いています。J E N では、被災者に対し、緊急支援として、仮の住処となるシelterキットや生活用品などを配布。仮の生活を自立して送れるように、農業指導やヤギの飼育を通じた生計回復支援を行っています。また、故郷に戻った帰還民に対しては、破壊された給水施設の整備と衛生教育を実施し、安全で健康的な故郷での暮らしを再開できればと願っています。その数は、一万余世帯を超えました。最も支援を必要とする人たちに支援を届けるために、その活動が持続可能になるために、パキスタン政府、他の支援機関、地域住民とも頻りに情報交換を行っています。国内避難民へは避難先・帰還後の自立を見据えた支援を、帰還民へは刻も早い故郷での生活再建を支援し、これからも地域の安定に貢献してゆきます。



ハイチ最大のイベント、ララ祭(イースター)会場に、JENの給水チームが登場。行き交う人々に衛生知識を普及します。

4 ハイチ

持続的な維持管理を



コンポストで作った養分たっぷりの堆肥。

3 スリランカ

組合の運営をサポート

北部ムラティブ県とキリノッチ県で行っている生計回復支援では「コミュニティ強化の環」として、現地の人々から選出・設立された農業協同組合の運営をサポートしています。組合では、コンポストを利用し、国による有機農業の推進で需要が高まっている「堆肥」の製造所運営を行っています。堆肥は各世帯から回収した「ミ」が材料です。「村のゴミが減り清潔になる上に、農業の助けになる」と地元で好評です。一方で、乾季の干ばつにより堆肥製造に必要な不可欠な水が不足しました。組合内での議論の結果、水不足が解消されるまでは堆肥の生産量を落とす、または生産を中止する事になりました。組合設立から3か月、堆肥の生産量は目標の500キログラムに対して400キログラムと下回りました。しかし、組合が自分たちの力で販売先を見つけた。農業局による買取にこぎ着ける。支援団体の事業資材として交渉する等、将来性のある良いニュースもあります。更に、交渉の過程で「パッケージングをしたら高く売れる」などのヒントを得たことで、次の生産に向けて組合員のモチベーションが高まっています。

ハイチでは、「人々が健康に暮らすこと」を第一の目標に活動しています。給水施設の設置のほか、話し合いを通して水回りのいろいろな課題を共有。地域住民が自らメンテナンスするしくみづくりを実施しています。その一つが、「キオスク」と呼ばれる給水施設と貯水槽の建設。水漏れが発生していた水路のパイプを修復し水源にします。建設場所は水の安全と利用の平等を考慮し、住民たちで決めます。利用する住民は、水を汲んだあとバケツ単位の水料金を支払うというしくみです。更に「水管理委員会」も結成。メンバーは選挙で選出され、施設の持続的な維持管理のための規定を作成します。もちろん水の安全が番なので、そのための知識も学びます。水は有料ですが、利用料は維持管理費用に充てます。一方で、住民の中から衛生促進を行なうボランティアを募り、衛生知識に関わるトレーニングを受け知識を向上してゆきます。彼らが中心になり戸別に家庭を訪問したりキャンペーンを行なうことで、地域全体の衛生知識や習慣の改善が実現します。

感謝の思いを伝えたい。 それが『浜へ行こう！』を始めた きっかけでした。

石巻市内中心部から南東へ車で30分ほどに位置する牡鹿半島では、東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、主な生活の糧である漁業は壊滅的な状況になりました。しかし多くの人・団体による支援活動が住民の気持ちを後押しし復興を進めてきました。『浜へ行こう！』は、それらの支援に対する、感謝の思いを伝えたいそして今後もよりたくさんの人との交流を続けていきたいという住民の思いから2012年末に始まった取り組みです。最初に始めた東浜では、回を重ねる毎により良い運営を工夫してきました。つの浜から始まった取り組みは2014年から複数浜が参加し、牡鹿半島全域に開催が拡がっています。

体制が生まれてきました。今後、「層協力しながら多くの方に牡鹿半島の良さをお伝えして行きます。」

＊

漁業体験では、漁師さんの船に乗船しホヤの養殖場を見学。



景勝地を散策する参加者。鮎川浜にて。

今後の『浜へ行こう！』の予定です。
ぜひ参加して、牡鹿半島の魅力を体験してください。

第9回	7月12日(土)～13日(日) 網地島(海岸清掃・地域清掃・漁業体験・BBQ)
第10回	7月19日(土)～20日(日) 鮎川(地元海産物の昼食)＋谷川浜(ホヤ・ホタテの漁業体験)＋大原浜(祭り体験)
第11回	8月9日(土)～10日(日) 網地島(地域清掃・漁業体験・BBQ・海水浴)
第12回	9月9日(火) 荻浜(祭り体験)

がら、震災の経験や復興状況などを話す機会になりました。参加者は、牡鹿半島の魅力を存分に堪能すると共に地元の方々の交流を楽しみました。参加者は、ニュースで知らない被災地の現状を見て、いろんな想いを胸に石巻を後にしました。



「第3回 Chabo! チャリティ☆ラン」のご報告

4月27日(日)「第3回 Chabo! チャリティ☆ラン」を開催しました。3回目を迎えた今年は、一般参加者92名、個人・法人ボランティア50名が参加していました。昨年に続き、第一部(午前中)はチームでタスキを繋ぐレラン&ウォーク。当日編成したチーム「ゲストフナー」が加わり、メンバー全員が協力し合って全チームが60分を完走＆完歩しました！また、「Chabo!ラン」の特長は、第二部(午後)の「交流タイム」。ゲストによるトークショー、グループ対抗「Chabo! ウルトラクイズ」、そして協賛企業の商品が当たる「特別抽選会」など、盛りだくさんのメニューでにぎわいました。「Chabo! チャリティ☆ラン」は、楽しいイベントを通じてJENの支援に参加していた多くの方々に、ボランティアの皆さま



印税寄付プログラム「Chabo!」に賛同しているビジネス本のベストセラー著者 勝間和代さん、酒井雅さん、白河桃子さん、出版社から干場弓子さん(Discover21)、森岡純一さん(光文社)がゲストランナーとしてご参加くださいました。そして、今年はスペシャル・サポーターとして、フィギュアスケーターの安藤美姫さんが駆けつけてくださいました！

「シリア危機：失われた世代にしないためにー子どもたちの現状」ヨルダン駐在のプログラム・オフィサー 太田千晶が登壇しました

5月17日(土)、UNHCR/ジャパン・ブラッドフォム共催シンポジウム「シリア危機：失われた世代にしないためにー子どもたちの現状」に、ヨルダンでシリア難民キャンプの支援を担当するJENスタッフ・太田千晶が一時帰国し、登壇しました。

者 報道機関、一般参加者の皆さままで満席。21世紀最大の人道危機と呼ばれるシリア危機」に対する社会の関心の高さが感じられました。



「難民を主体としたコミュニティ強化と自立支援」のタイトルで発表(JEN太田千晶)

事務局長木山啓子とJENスタッフの

往復書簡



今年1月に行った緊急支援では日用品を配布しました。 イエイのオフィスから事業地に向かうマーガレット。

啓子さん

年末に私の国、南スーダンで起こったクーデター未遂、それに伴う避難民への緊急支援は、私にとっては、初めての緊急支援ミッション。しかも、国際スタッフ不在の中、大事なミッションのチームリーダーのひとりに抜擢してもらえたことは、その後の、大きな自信につながっています。サポートを、ありがとうございました。

私がJENに入局したのは、2013年7月です。以来、若いころに南スーダンで取得した教員の資格と長く過ごしたウガンダの難民キャンプで取得して実践してきたカウンセリングの経験を生かして、日々の衛生教育の支援活動で、実践してきました。仕事を通して、子どもたちが衛生知識を学び、日ごとに健康になってゆくことを自分の目でみることができるこの仕事は、大きな達成感があります。

成長途中の祖国では、電話、道路などインフラが完全に整っていないので、不便を感じることが多々ありますが、

楽しく働くように、心がけています。また、多くの日用品を輸入品に頼る生活は、生活を圧迫していますが、秋から始まった女性のための石鹼生産プロジェクトによって、自分たちで作って、売って、使う、という基本的な生活を送れるようになりました。

国際スタッフが南スーダンに戻ってくるときには、いろんな事業が立派に軌道にのっていることを目標に、毎日、チームのみんなと仕事に励んでいます。

私たちを支援してくださっている日本の皆様、みなさんの戦後復興を学び、真似をして、南スーダンに復興をもたらしたいです。そのときもっとも大切な心構えは、自分たちで課題を解決できるようになること、これが自立だ、とJENで学びました。

イエイ地域担当
コミュニティ・モビライザー
マーガレット

Margaret

マーガレットさん

年末からの緊急支援、本当にお疲れ様でした。

2007年に独立前の南部スーダンに帰還してきた難民の方々の緊急支援活動を始めたときからずっと、人々が一日も早く安定した日々を迎えられます様に、と願ひ続けてきました。2011年7月の独立を経て、国がまだ不安定な中、南スーダンの人たちの国造りを支える仕事を、JENのみんなは誇りを持って続けてくれました。

独立からたった3年でクーデター未遂が発生し、人々が逃げ惑う事態になってしまうとは、残念でなりません。だからこそ、今回避難した人々のための緊急支援を行うことになったとき、あなたが緊急支援チームを率いてくれたことを、とても心強く思いました。日頃から電波が不安定だったり、毎日何時間も悪路を進まなければならないかったりと、お世辞にも楽とはいえない環境の中で緊急事態に対応しながら、従来の衛生環境改善の支援も、その手をとめることなく活動してくれましたね。

この混乱の中、マーガレットさんが強いリーダーシップでチームを率いて、チームワークがいかに発揮されたからこそ、可能となった支援でした。ひるむことなく緊急事態に立ち向かってくれて本当にありがとうございます。

ところで、イエイの活動では、新しい取り組みがたくさんありますね。たとえば、女性による石鹼組合。組合は、どんどん規模を拡大し、参加者一人ひとりのキャパシティ向上に着実につながっていますね。そして、女性疾患予防のための活動も始めることになりましたよね。いつか、あなたが率いるチームと、活動に参画している女性、女子生徒たちに会いたいです。そして、みなさんと夢について朝まで語り合いたいです。

木山 啓子



真ん中がマリアンさん。地滑りの様子を語ってくれました。

アフガニスタン地滑り 被災者緊急支援活動報告

北部バダフシャン州を中心に4月下旬から続いていた集中豪雨により、5月2日、大規模な地滑りが発生しました。これを受け、地滑りにより家を失ってしまった被災者の方々に、緊急支援を実施しました。

今回の洪水によるアフガニスタン全土の被害者数は、5月14日時点で北部17州97地区115,500人におよびます。また、この地滑りでは少なくとも503人が死亡しました。JENは、地滑りの被害が最も甚大だった同州アルゴ地区アブ・バラク村の850被災世帯に対し、緊急支援として日用品の配布を行いました。今回、支援の対象となった被災者は、地滑りにより家屋が土砂の下敷または崩壊し、所有物だけでなく家族を失った方々です。彼らは、

被災地から1キロ離れた安全な場所に設置された簡易テントで避難生活を送っています。配布した日用品は、衛生キット（石鹸やタオル、歯ブラシ、歯磨き粉、トイレトペーパー、爪切り、生理用品など）、水を運ぶためのポリ容器、プラスチックシート、2歳以下の幼児には、粉ミルクと哺乳瓶を配布しました。

アブ・バラク村出身のモハメッド・エフズさん（49歳）は、地滑りによって家屋を失い、2人の孫と義理の娘（9歳）を亡くしました。モハメッドさんは「あの地滑りが起こった日は、本当にこの世の終わりであると思いました。全てを失い、辛かったです。地滑り発生後、私たちは日用品や食糧の支援をうけました。中には、親を無くしてしまった子どもたちもいました。JENは、そんな子どもたちにも、一人ひとりに粉ミルクと哺乳瓶を配布していました」とおっしゃっていました。

3人の女の子が身を寄せ合っていました。その中の1人はペンで自分の腕に何かを一生懸命に書いていました。女の子の名前はマリアン、8歳の小学生です。彼女は、地滑りが起こった時、家族の結婚パーティの最中で、家から400メートルほど離れた結婚式会場にいました。マリアンはその時の様子を話してくれました。「突然ゴーツという大きな音がして、村が騒々しい音に包まれました。驚いて自分の家を見渡したとき、すでに400メートル先の家は土砂の下で、完全に崩壊していました。本当に怖かったです。今は、テントに避難していますが、早く仮設住宅に移れることを願っています。早く、学校に戻って勉強がしたいです」と話してくれました。JENでは、継続実施しているバルワン県での教育環境の整備と衛生教育の支援活動に加え、引き続きバダフシャン州での地滑り被災者緊急支援を続けます。

* 出典：国連人道援助調整事務所

自立を支える支援を今後も続けるために

皆さまからのご寄付は、寄付金控除の対象です。最大で約40%が所得税の税額控除となります。
※控除額は寄付金額や年間所得額によって異なります。詳しくはホームページをご覧ください。



郵便局から
00170-2-538657
口座名 JEN



遺贈寄付
ご自身の財産や大切な方の遺産を、JENが支援する世界中の人たちへ、確実にお届けします。



インターネットから
クレジットカードでご寄付いただけます。
(VISA、MASTER、JCB、AMEX)



生きるちから マンスリーサポーター
あなたの毎月の支援で、世界の人びとの、生きる力をサポートします。



本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載は固くお断りいたします。